

郷土史の考察
播磨史と亀山雲平の生涯中嶋裕子¹⁾ 中島友子²⁾

A Study of the Regional History of Harima and the Life of Kameyama Unpei

Hiroko NAKAJIMA¹⁾ Tomoko NAKASHIMA²⁾

Japan is now faced with a crisis of spiritual collapse: a lot of people, both young and old, seem to have lost the core of their spirituality because they are separated from each other and their past. It is important for Japanese to recognize how their ancestors struggled through their lives to survive and leave their spiritual and material wealth to our generation.

Many researchers have thus aptly pointed out that learning regional history will be one of the solutions to Japan's problems. In the regional history of Harima, Kameyama Unpei played a very important role. He worked to build the foundation of Japan as well as Harima from the end of Edo to the Meiji era. He was one of the most influential men in Harima.

We'd like to recognize his achievements, and also introduce his post cards found in the residence of Nakasima Hisakichi, Shikama Himeji. I hope this paper will be a helpful text for education in elementary and junior and senior high schools in the Harima area.

Key words : Kameyama Unpei, regional history of Harima, spirituality, Unpei's post cards, Nakashima Hisakichi

亀山雲平 播磨の郷土史 精神性 雲平の葉書 中島久吉

1. はじめに

現代日本は、少子化、地域社会の崩壊といった社会の活力の衰弱、モラルや教育の崩壊、性風俗の乱れ、青少年のいじめや自殺といった精神的価値観の危機に直面している。

現在、社会や子供たちに現われている問題の原因として戦後、伝統が途切れ、人間がいかに生きるべきか、人間とは何かなど、人間と社会についての自覚が希薄になったことが挙げられる。また、質素、儉約、報恩、感謝、誠実、思いやり、などの人間としての基礎的教

育がなされなかったことも原因である¹⁾。

この現状を捉えて国際日本文化研究センター教授の川勝は、現代の日本に必要なのは「美しい国づくり(美しい国の復活)」として、次のように述べている。「国を美しくするには自分のまわりのことがわからないではできません。必要なのはふるさと学です。・・・しかし世界や地球との関係で自分の地域を見ないと単なる郷土自慢と変わりません。お国自慢の郷土学とは区別して「地球・地域学」といっておきましょう。地球をにらんだ地域学です²⁾。」

元近畿福祉大学教授で教育問題研究委員会アドバイザー

受付 平成19年4月25日, 受理 平成19年6月8日

1) 関西総合リハビリテーション専門学校 〒656-2132 兵庫県淡路市志筑新島7-4

2) 近畿福祉大学 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

ザーである岡本は、今日の現状は基盤共同体である家族の教育力が大きく低下したためとして、伝統の知恵を活かしながら、かつて地域社会に力強く存在した教育力を回復する試みに取り組むことを提言している。氏の主催する教育問題研究委員会は、課題解決の方策として郷土を愛し、先祖を敬う、他人の幸せをも考える共生の心を培うことなどをあげている³⁾。

藤原はベストセラーにもなった『国家の品格』において家族愛、郷土愛、祖国愛、この4つのうち一つでも欠けては人間として信用されない、と述べ、郷土の歴史を知り、それを想う必要性を説いている⁴⁾。

渡邊は、生涯教育の立場から、現代において必要なことは、若年層が自分とは違う尺度や多様な価値観への柔軟な感性を磨く機会を増やすこととして、郷土史を学び直し、地域史を掘り起こし、地域文化や郷土芸能の再創造を提起している。更に、地域史の掘り起こしを異世代間の共同作業と位置付け、取り組むことの重要性を指摘している⁵⁾。

以上のように様々な研究者から郷土史の学びなおし、地域史の掘り起こしが現在の日本の抱える課題の解決策の一つとなるという認識が示されている。

郷土の歴史を学び、その大きな流れの中に生きる自分を発見することは、脈々と繋がる命を拝受しているという畏敬の念を抱かせる。また、地域や社会に於ける個の生き方を問い直す。郷土史の学びの中で培った思いや知識は郷土愛を育て、やがて、道徳観や倫理観の形成にも成るであろう。現在の教育現場における郷土史教育の再考は急務である。

本稿では、播磨史の中でも江戸から明治という大きな時代の転換期に生きた播磨聖人、亀山雲平をテーマとしている。現代の価値観の揺らぎの中で迷う現代人に多くの示唆を与えることであろう。

2. 目 的

本稿では、播磨の誇りである亀山雲平に焦点を当て、その人生を紐解き、その新たな発見について報告したい。亀山雲平は、江戸末期から明治にかけて日本の礎を築いた一人で、播磨聖人と称された。播磨の歴史を語る上で欠かせない人物である。

兵庫県姫路市では、姫路市教育委員会が郷土史として小学3年生には「お城物語」と5年生には「郷土史ひめじ」を副読本として無料で配布している。しかし、カリキュラムの中にそれらが組み込まれているわけではなく、郷土史の授業の実施についても各学校に任されているため、ほとんどの学校で行われていないのが現状である。筆者のインタビューでも、多くの小学校

の教師から、郷土史の副読本はあるが内容を知らない、どのように行ってよいのかわからない、適切なテキストがない、などの回答が寄せられた。

郷土史の授業が実施されない現状も問題であるが、播磨聖人と称された人物の記載の貧困さもまた問題である。「お城物語」で亀山雲平は播磨三山（庭山武正、春山弟彦、亀山雲平）として紹介されるも、その人となりや功績については記載されていない。その一因は、雲平が使用していた教科書、著書、交友を物語る消息などが非常に少ないことにある。

このたび、明治初期に建築されたといわれる姫路市飾磨区都倉の中島家にて亀山雲平から中島久吉への手紙や書など貴重な資料が多数発見された。新資料の発表を含め、雲平の生き方とその功績について報告を行う。

この報告が郷土史の教科書、または資料として参考にされることを期待する。また、本稿が郷土史に新たな側面を追加し、美しき日本の再築の一助となることを期待する。

3. 雲平の生涯

播磨聖人と仰がれ多くの門弟を教育し数多くの逸材を世に送り出した雲平は、幕末、明治の動乱期に播磨の地に大きな足跡を残している。雲平の生きた幕末から明治にかけての78年間は、徳川幕府が倒され薩摩・長州藩を中心とする明治政府に政権が移ったというだけでなく、封建社会から近代社会への過渡期であり、政治・経済・文化など、あらゆるものが欧米の近代文明に圧倒され、それまで長い伝統の中で培ってきた日本の価値観が目に見えて崩壊し変容していく激動の時代であった。

1) 幼少期から青年期 大儒学者としての雲平

姫山の東方五軒邸で1822年(文政5年)1月20日、父亀山百之と母頼家の間に次男として恭吉(後の雲平)が生まれた。

曾祖父亀山源五右衛門成賢は、書院番物頭役禄高二百万石の藩士であった。学問に熱心な人物で、多くの蔵書と辞世の句「柴の露とともに消えゆく夕べかな」を残して1781年(天明元年)8月2日58歳で没した。

祖父亀山源五右衛門成将は、大阪留守居番役禄高百八十石で大阪に住んだ。祖父は大阪崎門学脈(山崎闇齋学)の儒者、御牧申藏直斎について学び、父亀山源五右衛門百之は崎門朱子学の村田常昌に学んだ。このように亀山家は代々崎門朱子学の儒者の家系であり、雲平もその影響を十分に受け継いだ。曾祖父より父に至るまで代々多数の書物があり読書に事欠く事はなく

恵まれた教育環境の中にいた。

幼少期より父百之の学問に対する厳格な手引きの元で勉学に精を出し、好古堂⁶⁾、仁寿山巒⁷⁾、昌平巒と高等教育を学んだ。

1831年(天保2年)雲平10歳の時父を失うが、母は学問に励むよう諭し、雲平はこれに応えた。11歳にして姫路藩校好古堂で藩儒角田心臓(号は櫛園)について経史、詩文を学んだ。

1843年(天保14年)雲平22歳の時、突然兄剛毅が24歳の若さでこの世を去る。雲平は落胆し、食事もなくにのどを通らぬほど嘆き悲しんだといわれている。兄の死後雲平が亀山家を継ぎ、禄高140石を賜り、藩士としての軍籍は長槍隊隊長になった。

この年、雲平は藩主酒井雅楽頭忠實から好古堂勤務精勤につき金五両を賜り、今後も尚一層学問に精励せよと激励されている。

この頃幕府は政策に行き詰まりを感じ、優秀な人材育成を目指していた。そこで、全国三百諸藩から優秀な人材を江戸昌平巒に集め、そこから輩出された人材を用いて政治に新風を吹き込もうとしていた。1850年(嘉永3年)雲平29歳の時、姫路藩も亀山雲平を選び、昌平巒に入学させ日本有数の大学者佐藤一斎に学ばせた⁸⁾。雲平はこの偉大な学者一斎の門弟となり教育の真髄を学び取った。江戸昌平巒では当時唯一皇清経解千数百部を修学し、名実共に大儒学者となっていた。

明治に入り国が治まって後、私学校を設立して人々に学聖、賢人と称される教育者、学者となった素地はこの昌平巒時代に培われたのである。

同じ頃昌平巒に学んだ学友には、後日、内閣修史局長重野成斎、勤皇の士松本奎堂、学者堤静斎、岡鹿門、南摩綱紀、文学博士三島中州、帝室博物館総長股野藍田などがある。全国から集まった数多くの秀才達と交友を深め、雲平の名も全国に知られていった。

2) 青年・壮年期 激動期の政治家としての識見

甲子の獄

雲平の年譜で特に目を引くのは、江戸昌平巒への留学や江戸在番などを含め激動期の江戸で生活した期間が長いことである。江戸在番中にはペリーの来航(1853 嘉永6年)尊王攘夷運動に対する大弾圧、安政の大獄(1859 安政6年)(井伊直弼により吉田松蔭、橋本左内、頼三樹三郎ら8名が処刑、連座したものは100名にのぼった)桜田門外の変(1860 万延元年)水戸薩摩藩の尊皇派の浪士によって井伊直弼が暗殺される)などを身近に見聞していた。

1861年(文久元年)姫路藩主酒井忠顕に抜擢され大觀察の大役に就任、大目付を拝命する。1864年(元

治元年)雲平43歳時には、姫路藩でも尊皇派に対して弾圧を加える甲子の獄がおこり、家老高須隼人によって尊皇派とされるものが次々と逮捕された⁹⁾。

同年12月26日には、罷免、閉門、蟄居など厳しい処分が下された。このとき、雲平は大目付として深く関わっている。『遺芳纂録』の大西樫太郎の追想によれば、判決に当たって全員死罪に決しようという厳しい雰囲気の中、雲平は次のように主張したとある。

先生正ヲ守リテ動カズ「罪ノ軽重ヲ論セズシテ刑ニ処スルハ妥当ナラズ況シテ親シク手ヲ下サバリシモノモ斉シク死刑ニ処スルハ如何力」トテ誓々諍々トシテ論争セラレタレバ有司モ遂ニ其言ニ伏シタリ(「」は筆者)

雲平はその場の厳しい雰囲気にも妥協することなく冷静に事の顛末を見極めて大目付として公正に対処しようという態度を貫いている。雲平の人間性がよく表れているといえよう。また、炭本総太郎の追想によれば雲平は常に「主ヲ持ツ者其勤王ヲナサシム之レ真ノ勤王ナリ」というのが持論であったという。

雲平は、佐幕、尊皇と国論が二分される中にあって佐幕派に目されながらも、甲子の獄の時の態度や炭本総太郎の追想に見られるように、尊皇派にも理解を持ちながら時流に流される事なく、常に正を守り姫路藩のために主君に対する忠誠をもって職責を果たそうとした。

姫路城開城

1868年(明治元年)1月3日、鳥羽伏見の戦いが起こり、徳川軍は大敗した。雲平の長男亀山丈助方正も惨敗し帰還した。徳川方に味方した諸藩を打つ命令が新政府から出され、1月16日岡山池田藩1500名が姫路城西方の景福寺山に陣を敷き姫路城を攻撃した。雲平は、官軍の備前兵脩砲撃の中敵陣に乗り込み官軍大将池田図書頭と談判し、攻撃を中止させ翌日17日に無血開城させた。こうして時代は明治となった。

3) 老年期 教育者としての雲平

江戸時代から明治期、日本人の思考形成は朱子学と陽明学によってなされたといっても過言ではない。明治以降はヨーロッパ、アメリカの自由主義の教育思想が流入し、それらの思想を意識する事は少なくなっている。しかし、現代を生きる我々の思想にも朱子学と陽明学は動かしがたく存在している。

雲平は朱子学を人生の道しるべとし、教育に晩年の人生をかけた。播磨聖人亀山雲平の生涯において、特筆すべき一つは63歳から78歳までの15年間、観海講

堂での教育とその成果である。明治4年長男亨に家督を譲り隠居して恭吉から雲平へと名を改めた¹⁰⁾。幕末から明治維新、廃藩置県と激動の時代を切り抜け、新時代の基礎を築く世に身を呈した集積がみられる。

松原八幡神社の祠官と久敬舎の開講

河合寸翁が1823年(文政6年)1月に阿保山の麓に開いた仁寿山書院(後の仁寿山巒)は、1842年(天保13年)寸翁が没すると共に廃校となり藩校好古堂に併合されてしまった。灘地方の指導者は学問の場の不在を憂いてこれに代わるべき学校とその指導者を求めていた。かねてより聞こえ高い雲平は渴望的であった。しかし、江戸昌平巒よりも招かれ、藩の要職と好古堂教授を兼任していた雲平には難しかった。灘地区の大庄屋置塩倉倉、松原八幡神社総代会代表、松原村庄屋内海傳二郎、同村組頭炭本駒次郎が主となって雲平との交渉に当たっていた。

ある時、再三に亘って招聘の話のある灘地区への祠官を考え、松原村へ下見分にやってきた。古の歌人達が詠んだ「逢いの松原」の八幡神社付近の翠滴る松林、恋の浜より眺める瀬戸内の風景、広大な塩浜、村人達の活気に満ちた明るい表情に触れ、松原村が気に入る、この地で第二の人生を教育に打ち込むことを決心した。

1873年(明治6年)7月、青松白沙の景勝地白浜、飾東郡松原村の松原八幡神社の祠官となった。着任当初は神社の古記録、宝物、什器などの調査書を作成し宮庁に提出していた。灘のけんか祭りの隆盛にも功があり、村人達からも大変慕われ尊敬されていた。同神社の境内地に「久敬舎」という書院を開いて学問を教えた。久敬舎とは論語の一節「子曰、晏平仲、善與人交久而敬之」:人と人との交わりは敬いを以って貴とする。お互いに尊敬しあって礼を欠かぬようとの教えから取った名称である。

観海講堂の開講

1884年(明治17年)には、年をおうごとに門弟が多くなり、収容しきれなくなったため、講堂の並びに塾舎を建築した。名称も観海講堂と改め、昌平巒に学んだ教育を実践した。新たに塾則を改正し、多くの門弟の教育針とした。

観海講堂の名は「海ヲ観ルモノハ、大水ヲ知ル。故ニ之ヲ説クニ、小水ヲ以テシ難シ、聖人ノ門ニ遊ブモノハ大道ヲ聞ク、故ニ之ヲ説クニ、小道ヲ以テシ難シ。」に由来する。明確な教義と理念を以って「國家一旦ノ用ヲ待ツ」人材の養成教育を実行した。

朱子学を基礎とした教育方針

講堂には孔子を祀り、朝一同礼拝して後熱い茶を

すすってから雲平の講義が始まったといわれている。

雲平は4つの基本方針に沿って塾生らを指導した。

第一の柱は論語の一節である「発憤しては食を忘れ、楽しんで憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らず」である。進んで問題を求め其の解決にひたぶる精進をする事である。

第二の柱は朱子学である。朱子学は江戸時代寺子屋、藩校で学ばれた。朱子学の中枢は次の白鹿洞学規に表れている。朱子は以下に記す「白鹿洞書院揭示」を作って修学の要諦を示し、後世の者はこの教えに従って学問を修めた¹¹⁾。

一、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり。

一、博くこれを学び、審らかにこれを問ひ、慎んでこれを思ひ、明らかにこれを弁じ、篤くこれを行ふ。

一、言は忠信に、行は篤敬、忿りを懲らし、欲を塞ぎ、善に遷り過ちを改む。

一、その誼を正してその利を謀らず。その道を明らかにして、その功を計らず。

一、己の欲せざる所をば、人に施すこと勿れ。行ひて得ざる事あれば、これを己に反りみ求む。

(白鹿洞書院揭示、訳)

一、父と子の間には親愛の情がなければならない。主従の関係には義理と忠義が大切である。夫婦関係は絶対に乱してはならない、姦淫はしてはならない。友達同士は信頼し合わなければならない。

一、広く学び、精読してはつきり記憶し、記憶した倫理と現実との差を問ひたし常に思索を重ねる。倫理的な知識と言うもので善悪を明確に区別し、十二分に検討してから行動に移さねばならない。

一、言葉は吐く時は真心を尽くす。誠実で慎み深く行動し、怒ってはならない。欲は閉じ込めねばならない。

一、義理を実行し、利益を考えない。自分が進む道を知識的に明らかにし、その結果は問わない。

一、自分が望まない事を人にしてはならない。もし思うようにいかない事があれば自分を内省しその原因や理由を自分自身に求めねばならない¹²⁾。

第三の柱は、「文林・詩壇に遊ぶ」ことである。孔子の教えである六経語孟を学ぶ事が最も大切であるが、経義の究明だけではなく空想に遊び理想に燃え、時には虚構の世界に思いを馳せるなど自由な心のはばたきを伸ばす事も重要であるとして、文章を練り詩作に凝ることも重視した。雲平はまた、「一張一弛八文武ノ道也」と説き、自らが率先して一弛の場をつくり、門弟を緊張から解き放ち他日の勉学の基と

した。

第四の柱は修学の究極の目的は国家社会の為にあり、これを自覚させることである。自覚と実践。雲平の「國家一旦ノ用ヲ待ツ」といったのはこのことであり、これぞ観海講堂における教育の究極目標といえよう。社会の一員として立派に生きる人材の育成を目指した。雲平の座右の銘は「國爾忘家」、すなわち国を思い私のことは考えない滅私奉公の精神であった。

多くの門弟

雲平の教える観海講堂が有名になるにつれ、かつて江戸昌平覺で学んだ学友や全国の学者が次々と訪れた。内閣修吏局長重野成斉、東京大学教授（旧昌平覺後東京帝国大学）南摩綱紀、同大学教授岡鹿門、文部大丞長三州学者長梅外、松本圭堂らである。播磨各地から雲平を慕って教を請う者が列をなした。門弟3000人といわれる¹³⁾。

教導職として各地の研修会などに講師として出講する事が多くなったので金井利信を教授とし5人の助教授を任命して観海講堂の運営を任せた。

雲平の人柄と人生の終焉

雲平の人柄を表すものとして、雲平の高弟で観海講堂の教授兼塾長であった金井利信の言葉がある。

「利信の先師に従ふや、顔る久し明治十年の春初めて、束脩の礼を行つてより、爾後二十年の長日月にして、其間懇到なる教訓化育に浴せしこと能く筆舌の盡す所にあらずなり。後遂に擢んでられて、其家塾観海講堂の塾長を命ぜられるなど、其他提撕指

尊数ふるに違あらず、思ふて茲に至れば、其恩実にとらちねの君にも劣らざるなり。嗚呼此の恩何を以て報ゆるを知る。況んや此の洪大なる恩徳をや¹⁴⁾。(後略)」

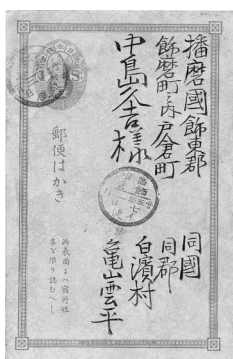
また、当時雲平と親交のあった白浜の米沢菊次は雲平を「質素儉約を旨とし服装も木綿で満足し、絹などの甘美に流れず己をいさめていた。金は親戚や旧知の友、塾生の生活に目を配り帰省の旅費を助けるなど豊かでなくとも他者を思いやっていた。」と人々に播磨聖人として称えられた雲平を紹介している。

明治32年5月6日、病に犯され78年の波乱に満ちた人生を閉じた。葬儀は壮大で松原村観海講堂から姫路景福寺まで葬列は続いた。葬儀委員長は播磨三山の一人庭山武正であった。姫路端松山景福寺に葬られる。

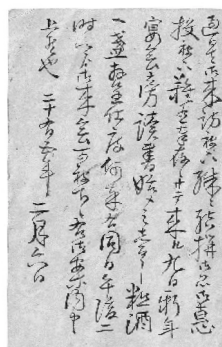
4. 雲平に関する新資料

1) 雲平から中島久吉、中島正蔵への葉書

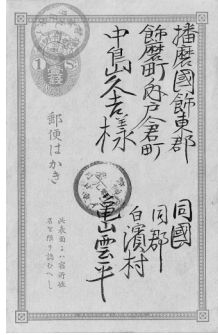
播磨聖人と称された雲平に関する資料は極めて少ないが、此の度、雲平直筆の葉書、書簡、額などが現姫路市飾磨区都倉の中島家で発見された。今回はその一部である雲平からの中島久吉と中島正蔵宛の葉書を紹介する。当時の雲平は70代であり久吉は十代後半から二十代前半であった。正蔵は久吉の2才9か月年下の弟である。正蔵は飾磨郡第三高等小学校職員（現在の教員）を経て軍人となる。日露戦争で負傷し死亡する。久吉については、後述する。



明治二十五年二月七日



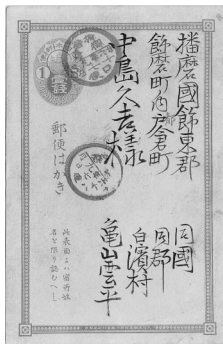
過日者(は)御来訪被下殊二結構御品御患投被下難有奉存候サテ来ル九日新年宴会旁読書始
メ之志、粗酒一盛拜呈仕度何卒右同日午後二時頃ヨリ御来会可被下候右御案内申上候也
二十有五年二月六日



明治二十六年九月一日

先般御來訪殊ニ中元御祝儀シテ重寶ナル御品御余分ニ被下置奉大謝候サテ九月二日ヨリ御例講可相始之處此間ヨリ老妻コト兼テ中風症之處不図発熱困難在(まかりあり)療養向差支罷在候二付今少々之内御休業被下度何レ日限之儀八更可申上二而御座候恐入候得とも木下志田之両兄江モ何卒右之趣御通報奉願上候此段御依頼申上候
八月三十一日

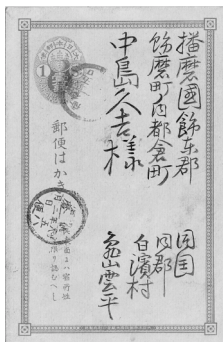
過日八御來訪殊ニ中元御祝儀シテ重寶ナル御品御余分ニ被下置奉大謝候サテ九月二日ヨリ御例講可相始之處此間ヨリ老妻コト兼テ中風症之處不図発熱困難在(まかりあり)療養向差支罷在候二付今少々之内御休業被下度何レ日限之儀八更可申上二而御座候恐入候得とも木下志田之両兄江モ何卒右之趣御通報奉願上候此段御依頼申上候
八月三十一日



明治二十六年九月十七日

先般御來訪殊ニ中元御祝儀シテ重寶ナル御品御余分ニ被下置奉大謝候サテ九月二日ヨリ御例講可相始之處此間ヨリ老妻コト兼テ中風症之處不図発熱困難在(まかりあり)療養向差支罷在候二付今少々之内御休業被下度何レ日限之儀八更可申上二而御座候恐入候得とも木下志田之両兄江モ何卒右之趣御通報奉願上候此段御依頼申上候
八月三十一日

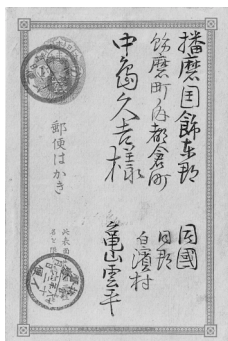
先般者病人二付暫々御休業相願ヒ恐入候病人コトモ追快方二付明後十九日ヨリ御來読被下度尤午後之会八未夕教員の方へ打合せ不申候先少朝之内ノミト御承知可被下候右之段申上度何卒木下熊吉君へ御通報奉願候志田君へ八別二はがき差出申居候此段モ御承知奉願候
二十六年九月十七日



明治二十八年二月五日

新年者早々御來賀被下其後大ニ取紛レ御無音打過候サテ来ル八日ヨリ例会相始メ申度且ツ一盞呈シ度候間何卒例刻ヨリ御來会可被下候右発会之儀延引相成恐入候何分ニモ御差繰右八日御出席奉待候也
二十八年二月五日

新年者早々御來賀被下其後大ニ取紛レ御無音打過候サテ来ル八日ヨリ例会相始メ申度且ツ一盞呈シ度候間何卒例刻ヨリ御來会可被下候右発会之儀延引相成恐入候何分ニモ御差繰右八日御出席奉待候也
二十八年二月五日

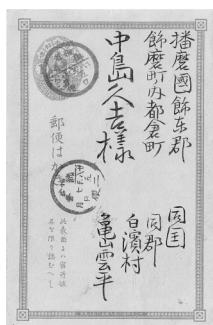


荆妻儀昨十日午後九時養生不相叶致死去候二付明十二日午前九時爰元出棺姫路城西西景福寺山塋域へ埋葬致し候右二付私事右十日ヨリ廿日間之忌引致候来七月初旬二者日課相始メ申度尚其日限者重テ可及御通報候先者右之条々延引御承知被下度如此御座候也
二十八年六月十一日

明治二十八年六月十二日

荆妻儀明十日午後九時養生不相叶致死去候二付明十二日午前九時爰元出棺姫路城西西景福寺山塋域へ埋葬致し候右二付私事右十日ヨリ廿日間之忌引致候来七月初旬二者日課相始メ申度尚其日限者重テ可及御通報候先者右之条々延引御承知被下度如此御座候也

二十八年六月十一日

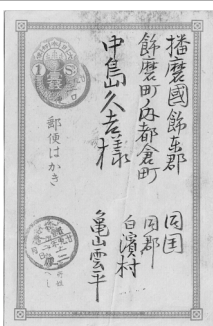


凶事之節八遠路御見送り被下且又御吊贈等被下置又其前後二八御見舞等重々御恵投被下萬々奉拝感候サテ私事六月三十日(ヨリ)忘明二相成七月初旬二八日課可相始之処尚又患息之病氣ヲ以テ彼レ此レ取紛レ大ニ延引相成恐入候右患息コトモ近々快方ニ相向ヒ候得とも自然本月十日過二モ相成ラテ八手離シ難ク右二付大ニ恐入候得候モイツソ七月十七日(ヨリ)例之通二御来駕被下候事二奉願度ト相考ヘ申候去ルカハリ又々御相談ニテ八月八暑休ミナレ(トモ)半月位八勉強仕候ても不苦何分ニモ此旨御承領七月十七日(ヨリ)御来駕之コトニ就テ八諸君へも如此御報知可申通心得二御座候此段御了知奉願候恐々

明治二十八年七月五日

凶事之節八遠路御見送り被下且又御吊贈等被下置又其前後二八御見舞等重々御恵投被下萬々奉拝感候サテ私事六月三十日(ヨリ)忘明二相成七月初旬二八日課可相始之処尚又患息之病氣ヲ以テ彼レ此レ取紛レ大ニ延引相成恐入候右患息コトモ近々快方ニ相向ヒ候得とも自然本月十日過二モ相成ラテ八手離シ難ク右二付大ニ恐入候得候モイツソ七月十七日(ヨリ)例之通二御来駕被下候事二奉願度ト相考ヘ申候去ルカハリ又々御相談ニテ八月八暑休ミナレ(トモ)半月位八勉強仕候ても不苦何分ニモ此旨御承領七月十七日(ヨリ)御来駕之コトニ就テ八諸君へも如此御報知可申通心得二御座候此段御了知奉願候恐々

二十八年七月四日

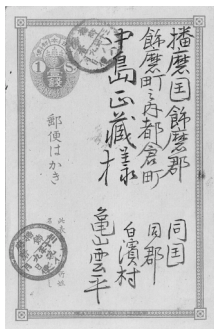


旧年モ御尋被下又新年モ御来賀被下御厚情奉感謝候サテ来ル六日二正午比ヨリ開講トシテ諸兄へ一盃相呈シ度候間何卒御旧縁ヲ以テ御来会被下度奉侍上候此段御承領被下度尚拝眉萬々(いろいろと)可申謝恐々

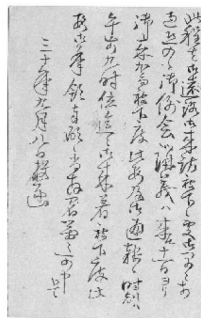
明治二十九年二月二日

旧年モ御尋被下又新年モ御来賀被下御厚情奉感謝候サテ来ル六日二正午比ヨリ開講トシテ諸兄へ一盃相呈シ度候間何卒御旧縁ヲ以テ御来会被下度奉侍上候此段御承領被下度尚拝眉萬々(いろいろと)可申謝恐々

二十九年二月一日書



明治三十年九月九日



此程者御遠路御來訪被下候處御早々打過恐入候御例会以講義八來ル十日ヨリ御來駕被下度此段及御通報候時刻八午前九時位迄二御來着被下度此段御承領奉願候尚拝眉萬々可申上候
三十年九月八日投函

2) 文面から偲ばれる雲平の人柄とその内容

それぞれの葉書の下に内容を記した。久吉からの贈り物への礼や会の開催時期について、また、雲平の妻の病状や息子の病のことなど家庭の事情なども書き表されたものであった。これらから雲平の心の機微や家族への思いを垣間見ることができる。

葉書の日付より、明治9年生まれ久吉は、当時、数え17才から22才であり、師雲平は70才を越していたことがわかる。しかし、雲平の久吉に対する文面は丁寧かつ心のこもったものである。その文面からも几帳面かつ誠実な人柄が偲ばれる。

文面から久吉が敬慕する雲平にできる限りの礼を尽くしたことが伝わる。雲平の丁寧な便りは雲平の人柄を示すと同時に、久吉の向学心に雲平が応えたものといえるであろう。文面には志田、木下熊吉、中島正蔵の名があり、飾磨に住む久吉の弟や知人もともに学んだことがわかる。

書作品についても書家から「簡潔、清韻にして格調高く、背筋の通ったそのすがすがしさは見るものの心をあらう。書に対する雲平の姿勢が目につかぶ。」と評されている¹⁵⁾が、葉書からも筆先がよくきいた確かな線質から雲平の生き方が伝わる。高い教養と広い見識、高邁な思想と人生観をもった雲平の生涯変わる事のない真摯な人柄が伝わってくる。

3) 雲平の弟子中島久吉のその後

久吉は24才の時敬慕していた師雲平を失うが、久吉は雲平の意志を継ぎ文化、経済、社会の発展に尽くした。その後の久吉の人物像は昭和初期に発行された自治団体之沿革（兵庫の部）から知ることができる。雲平から教えを受けた久吉の消息を紹介する。

都倉郵便局長

中島久吉

飾磨郡飾磨町都倉

電話 飾磨番外二番

「詩人局長、それは一郷に喧傳されつゝある我が中島君の別名だ。詩想豊かにして理想の境、夢幻の域に遊びて詩人中島の名を馳せるかと思へば、現実生活を直視し、社會道念に燃えて公共の福利増進に努めて地方功勞者中島の名をして功勞者中の一光彩となす。優に床しき温情味と鎧の如き堅志と、火の如き熱情の溶鑪、我が中島君の存在こそ、正に特異的であり光彩的でなくてはならない。区長に就任町自治の第一段階を踏んだのが君年齢僅か二十五歳の時、引き続き在任二十餘ヶ年、更に町曾議員に當選、其の回を重ねること数度、町政上に偉大なる足跡を印した君は、更に地方通信事業の文化發展と不可分の連關に在るを痛感するや、大正十二年六月二十五日都倉郵便局長に就任、高雅な性格を具現して部下に接して温味豊、業務に従ひ人に應待して懇切丁寧、亦常に貯金思想の普及に努め、貯金高に異常なる成績を収めて他局の範とされ、其の眞摯なる態度は町民畏敬の焦點をなしている。傍ら町農曾総代、飾磨町恵比寿水利組合協議員を兼ね、公務に盡瘁して多忙なる少暇を割愛しては、詩に畫に樂焼に親しみ、號を霞山と稱し白鷺吟社と命名し會員十名、毎月一回開くを例とし、藝術美豊かな生活を描いてゐる。父君を惣一氏と言ひ、君はその長男、明治九年二月十二日生まれの本年五十五歳、詩藻圓熟し、公的精神高潮に達するとき、高風眞に欽仰すべきものがある。」(下線は筆者)

下線部にあるように久吉は白鷺吟社を創立し文化の

発展にも寄与した。雲平の門下より針陽吟社 金井水山脇坂木村、山陽吟社 岡田樟蔭、鷺山吟社 小谷蘭堂、南里吟社 倉本傑山、方髪南里吟社 旗山、偕楽亭 倉本傑山、雙碧楼 伊藤晚香、紅蓮館 陳雨農、姫路響洋社、杏雨詩稿 伊藤伊太郎、などの吟社が誕生した。尚、吟社とは門徒達が集まってつくった漢詩の会である。月一回会誌を発行し会員は自分の作詩文を掲載発表していた。

5. おわりに

亀山雲平は激動の時代を生き抜いた。国を思い人を思い郷土に尽くした人生であった。人生を修学と実践で貫き、その成果を次世代の若者に託した。亀山雲平は郷土の誇るべき偉人であり、その人となり、思いを学ぶにあたり郷土への愛着と脈々たる歴史の流れを肌で感じる事ができる。

中島久吉は当時の富裕層の代表であるといえる。現代の富裕層の多くは自己の満足を追い求めているように思えるが、久吉は、富裕であるからこそできる学問、芸術を地域に還元し、町政、町の文化発展に寄与した。久吉は自分の置かれた場で雲平の教えを実践したとい

えるであろう。雲平の教えた「國家一旦ノ用ヲ待ツ」國家一旦の用に役立つ人材となったのである。

現代日本に必要なことは温故知新である。戦後、世界第一の経済大国となる間、経済政策にひた走り、アメリカの占領政策もあいまって、日本人としての誇りと伝統をとぎらせてしまった。今こそ郷土史に、そして日本の知恵と文化に光をあて自国の誇りと美を取り戻さねばならない。郷土史掘り起こしの一助として雲平の生涯と教育者としての成果の一端を新資料を用いて紹介した。

郷土史として時間を割いて教えることがカリキュラム上困難ならば、小中高等学校の日本史の授業に郷土の歴史を絡ませ教えることを提案したい。激動の時代、広い見識を持ち郷土を守った先人たちの知恵や生き方に触れることでつながる命の尊さ、郷土への愛着、誇りを育てられると信じるものである。世界遺産である姫路城を仰ぐ時、築城のために苛酷な労役と莫大な費用負担の犠牲になった領民、無血開城を成功させた亀山雲平、国を憂い命をかけて戦った先人、その混乱の中、生き続け、現在の私達に命をつないでくれた人々を思う心が育まれることを願う。

亀山雲平 年表

西暦	年号	年齢	事 跡	社会情勢
1822	文政5年	1	1月20日 姫路藩士亀山百之の次男として姫路に誕生	
1825	文政8年	4		異国船打払令
1832	天保3年	11	姫路藩校好古堂で藩儒 角田心蔵に師事	
1837	天保8年	16		大塩平八郎の乱
1839	天保10年	18	4月16日 偶日方句続手伝いを拝命 7月5日 上記本役を拝命	蕃社の獄
1841	天保12年	20	書物預役兼務を拝命	天保の改革
1842	天保13年	21	8月 好古寮肝煎を拝命	
1843	天保14年	22	2月26日 指南手伝いを拝命 9月30日 兄剛毅病没。亀山家を継ぐ 11月 焼火番を拝命 12月23日 書物預役を免ぜられる	
1846	弘化3年	25	9月22日 好古寮肝煎を免ぜられる 12月6日 好古堂助教となる	
1850	嘉永3年	29	抜擢され江戸昌平坂学問所に寄宿する	
1851	嘉永4年	30	江戸昌平坂学問所に入り、日本有数の大学者佐藤一斎に師事	
1853	嘉永6年	32	2月26日 昌平坂学問所書生寮詩文掛を拝命 6月8日 中小姓を拝命 12月1日 昌平坂学問所を退学	ペリー浦賀来航(6月3日)

中嶋裕子、中島友子

西暦	年号	年齢	事 跡	社会情勢
1855	安政2年	34	6月1日 藩校好古堂の教授となる	
1856	安政3年	35	7月11日 江戸在番を拝命	
1859	安政6年	38		安政の大獄
1860	万延元年	39		桜田門外の変
1861	文久元年	40	11月5日 藩主より抜擢され大觀察の大役に就任、大目付を拝命	
1862	文久2年	41		坂下門外の変
1864	元治元年	43		長州征伐・1回、姫路藩甲子の獄（12月26日）
1865	慶応元年	44		長州征伐・2回
1867	慶応3年	46		大政奉還、王政復古の大号令
1868	明治元年	47	1月13日 備前軍使応接役を拝命 大觀察として備前軍との交渉係 1月17日 姫路城明け渡し 6月14日 絵図文御番を拝命 8月 病のため役職を辞す	鳥羽伏見の戦（1月3日～1月6日） 戊辰の獄（12日） 9月8日 明治に改元
1869	明治2年	48	3月 総社門御番方を拝命	藩籍奉還
1871	明治4年	50	1月28日 長男亨に家督を譲り隠居して恭吉から雲平へと名を改める。	廃藩置県
1872	明治5年	51		学制を發布
1873	明治6年	52	7月23日 飾東郡松原村の松原八幡神社の祠官となり同神社の境内地に「久敬舎」設立 8月17日 飾磨県御雇いにより地誌提要取調べをする 12月18日 大教正有馬頼咸より教導職9級試補を申し付けられる	
1877	明治10年	56		西南の戦争
1878	明治11年	57	11月28日 播磨国神道事務分局副長担任となる	
1881	明治14年	60	8月13日 内務省より権大講義に補せられる	
1884	明治17年	63	9月17日 一等仮試験合格証を兵庫県皇典講究分所より下付される 10月1日 観海講堂落成	
1885	明治18年	64	9月20日 神道管長稲葉正邦より大講義に補せられる 10月16日 飾東郡祠官掌副取締りとなる 10月19日 権少教正になる	
1887	明治20年	66	6月16日 神道姫路分極内局顧問となる 12月26日 少教正になる	
1888	明治21年	67	11月23日 飾東郡祠官掌取締り担任となる	
1889	明治22年	68		憲法發布
1890	明治23年	69	8月12日 兵庫県皇典講究分所受け持ち委員となる	教育勅語發布
1892	明治25年	71		中島久吉への葉書(数え17才) 2月6日

西暦	年号	年齢	事	跡	社会情勢
1893	明治26年	72		中島久吉へ(18才) 8月31日 9月17日	
1894	明治27年	73			日清戦争
1895	明治28年	74	6月10日 午後9時妻死去 (名前は不明) 10月28日 長男亨死去	中島久吉へ(20才) 2月5日 6月11日 7月4日	
1896	明治29年	75		中島久吉へ(21才) 2月1日	
1897	明治30年	76		中島正蔵へ(20才) 9月8日	
1898	明治31年	77	1月1日 神職監理局姫路市飾磨郡分局長となる 1月11日 姫路神社及び射楯兵主神社社司を兼務する		
1899	明治32年	78	4月26日 射楯兵主神社社司兼務を免じられる 5月6日 観海講堂において病のため死去 姫路瑞松山景福寺に葬られる		
1900	明治33年		10月 観海講堂閉校		

注) 年齢は全て数え年で記載。

参考文献

- 1) 大西康之: 今、日本に欠けているもの 社会や経済の乱れと「社会教育」. 15, 講談社出版社サービスセンター, 東京, 2006
- 2) 川勝平太: 「地域の自立と不可分」. 『提言』, 産経新聞 1月7日, 2007
- 3) 岡本幸治: 総論「学校外教育になぜ取り組むのか」 京都経済同友会・教育問題研究委員会, 2007
- 4) 藤原正彦: 国家の品格. 東京, 新潮新書, 2005
- 5) 渡邊洋子: 少子高齢社会と家族観の変容 新たな共同性の構築に向けて . 日本社会教育学会編, 高齢社会における社会教育の課題, 170 - 182, 東京, 東洋館出版社, 2001
- 6) 好古堂の校訓は「忠孝をもつばらにし、文武に励み身代みだらにすりきらざるは奉仕の第一なり」である。
- 7) 1822年(文政5年) 雲平の誕生、藩校好古堂の移転大拡張と家老河合寸翁の創立した仁寿山巒が開校された。好古堂は藩校であったため、藩士の子もしか入る事ができなかった。習う学問も藩を治めるために都合よいものであったため、自由な教育はできなかった。そこで、寸翁は枠に縛られないもっと自由な学問を通して将来の日本や世の中の役に立つ

人間を育てようとした。河合寸翁は仁寿山巒を創立するにあたり、藩主酒井雅楽頭忠實に差し出した上申書に「(前略) 実に得難きは人材、一時千頃(300万坪)の田、万金(大金)の宝を以って購われ候とも、一人の賢材を得られ候らえば、所謂、安富尊栄、ただ千頃の田万金の宝のみに止まり申間敷く、誠に以って人材は国家の大宝と存じ奉り候故云々」と述べている。人材養成の重要性を説き、自らもそれを実行に移した。頼山陽など当時の日本の著名な学者も教鞭をとり、全国より著名な学者達や教授を講師に招いた。佐幕派の姫路藩より多くの勤皇の志士はこの仁寿山巒より排出した。20年後寸翁が没すると藩校の充実を名目に山巒は廃校となった。このとき雲平21歳。

- 8) 『言志四録』とは江戸時代後期の儒学者、佐藤一斎が筆録した、全1133条に及ぶ「思想の断片」である。その後長く処世の書、修養書として読み継がれてきた。門下生は数千人もいたと言われ、孫弟子に勝海舟、坂本龍馬、吉田松陰。ひ孫弟子に明治維新に活躍した伊藤博文、木戸孝允がいる。また、西郷隆盛も、師弟関係はなかったが、沖永良部島の獄中で『言志四録』を精読し一斎には強い影響を受けたといわれている。

また一斎は江戸幕府の最高教育機関であった昌平巒

- の儒官を歴任、江戸時代最高の碩学であった。「言志録」(246条)「言志後録」(255条)「言志晩録」(292条)「言志叢録」(340条)の四種類を総称して『言志四録』と呼んでいる。
- 9) 甲子(かつし)の獄とは、姫路藩で起きた尊王攘夷派の弾圧事件である。前年、姫路や京都で相次いだ佐幕派要人の暗殺に関与したとして、藩士ら70人以上が裁かれた。尊王攘夷派のリーダー格河合惣兵衛(1816 - 64)は自害、脱藩を企てた養子の伝十郎も死罪となった。藩主の酒井忠績が幕府要職にあり、藩内の佐幕派と尊王攘夷派の対立が背景にあったとされる。
- 10) 恭吉、式毅、由之、敬佐、源五右衛門、美和、雲平、号 曳庵、節宇と名を改めた。
- 11) 白鹿洞書院揭示：朱子が白鹿洞書院を再建する際に定めた学生心得。日本でも儒教教育の基本として各藩校などで掲示された。
- 12) 境野勝悟：陽明学と禅のこころ。知致出版，東京，2004
- 13) 雲平の高弟であった岡田重成は白浜聖人と讃えられ、重成の次男である岡田武彦は日本有数の大儒教学者となった。武彦は崇物的志向こそが日本が世界に誇る根本的精神であると力説。崇物とは物の本来の行き方を全うさせる事に他ならない。今後日本人はこれを自覚し世界に向かってその必要性を述べ人類の思想文化向上に貢献しなければならないと論じた。「敷島の大和の国を人とはよろつの物を畏れ敬う」と詠じている。
- 14) 亀山雲平顕彰会：青松白砂。1991年6月
- 15) 亀山雲平顕彰会：青松白砂。池田氏の評 1990年8.13, 1992年11.1